



効果ある利用者教育を目指して —関西医科大学での取り組み—

山田 久夫

近年、社会環境の変化の中で医学部図書館の役割が変貌しつつある。この図書館を取り巻く環境は大きく3つに分けることができる。

一つめは、ジャーナルや学術データベースのオンライン化である。その結果として来館者が減少する反面、インターネットを利用した情報提供というような図書館の利用形態に大きな変革をもたらした。このことは厳しい財務状況の中、継続的にこれらのインフラを維持するための予算を確保しなければならないという命題を投げかけている。

二つめに、大学の構造改革の一環として、図書館に対しても予算削減・人員削減や組織統合への圧力が強いことが挙げられる。

三つめは、医学教育改革であり、教養課程の縮小、PBL チュートリアル教育法や OSCE (客観的臨床能力試験) の導入、情報教育や英語教育の充実、EBM に基づいた考え方の教育、研修医制度の必須化などである。

関西医大では、教養課程や附属病院分院などにキャンパスが分散しており、この条件下での資料の有効利用を考えると、学術情報のオンライン化は必須であった。このことは、医学教育改革とあいまってオンライン化や EBM に対応した利用者教育の大きな需要を生む結果を招いた。

大学の構造改革では、私自身は図書館組織の

長として単に学校法人施策への抵抗勢力になるのではなく、「図書館は教育研究にとって最重要のインフラである」という認識を、ユーザー代表として広めようとした。そのため、図書館業務内容の見直し(拡大)と全学へのアピールとして利用者教育は格好のモデルとなった。教育職でない館員が限定された範囲内において、大学教育課程における教育を担当することについて、私自身は全く問題ないと考えている。また、従来の図書館業務の枠に縛られず、図書館職員は積極的に教育・研究分野への支援活動を実施し、そのことを通して専門職としてのスキル向上に努めるべきであるとも考えている。

現在行っている利用者教育は、おもに PubMed や医中誌などの文献検索、EndNote などの文献管理ソフト、UpToDate や Cochrane Library などの EBM の活用、電子ジャーナルの利用法などである。本年度の実施は、大学の教育課程の一環として、第3学年の医療情報学カリキュラムの中で2時間程度、大学院の導入コースの中で2時間程度、臨床研修センターの初期オリエンテーションの中で2時間程度、また職員研修の一環として、一般職員や研究者のうち希望者を対象とした情報センターの講習会(年100回程度、1回2時間)の中で3回、附属病院分院への出張講習が年1回である。これらとは別に従来と同様、希望者に対しては随時利用者教育を行っている。

これまでは、これらの講習に相当するものとして、毎年1カ月程度の期間を設けて希望者があれば少人数の利用者教育を実施し、一定の成

やまだ ひさお：関西医科大学 附属図書館長
(解剖学第一講座 教授)

yamada@takii.kmu.ac.jp

果を上げてきた。また定期的なコースでは、一般職員や看護職員などが参加しにくい事情もあり、これまで大学院コースからの参加呼びかけには応じてこなかった。しかし本年から「実験動物の扱い方と動物愛護」「医学倫理審査の必要性と申請法」「RI 講習会」「共同利用研究施設の利用法」「バイオハザードの扱い方」「論文作成のための医学統計学」などの大学院初期導入コースの一つとして「文献検索・図書館利用講習会」のタイトルで参加した。今回は受講生が十数名程度だったため、来年は時間や日程などの工夫が必要と考えている。低学年の学部教

育における EBM の講義実習は全国的にも珍しい試みであり、継続・発展させたいと考えている。臨床研修センターでは、センターの行う初期オリエンテーション全体に館員が協力した。

教育課程として、または職員研修としてかは問わず、学内の各種講習コースに図書館が参加することは、講習の位置づけが明瞭となりシステムティックな利用教育ができるため、メリットがあると考えている。受講生をはじめ、附属病院などの各部署、教務委員などの委員会を含む学内からの反応もきわめて好評である。